

『願い』

ルポレットが言い残した通りに彼の秘書が『ワーム』を起すには更に長大な時間が必要だった。睡眠をとらなくてもいいはずの龍なのに、『ワーム』は実に寝汚くて、秘書は鐘楼付きの悪魔たちと一緒に丸一日がかりで起す羽目になったのだ。

それに犠牲も大きかった。揺り起こすでは埒があかないとみるや、秘書は悪魔たちに実力行使をさせたのだが、テラムリアに存在するどんな悪魔よりも強大な力を持つ『ワーム』である。

寝ぼけていて無防備でいる筈なのに、攻撃した悪魔たちはことごとく寝返りで叩きのめされてしまった。人間の子供の姿をしたままの『ワーム』がごつい悪魔達を叩きのめすとは、いかにもシュールな絵である。

まる一日それを繰り返せば流石に鬱陶しくなったのか、『ワーム』もようやく目が覚めた。

そして目の前に転がっている気絶した悪魔たちの間に、ルポレットと同種の、狼頭の悪魔が立っている事に気付いた。

「何かあったの？」

「はい、閣下。アンゲルウルプ攻めは失敗し、諸族の軍は大敗しました。

また閣下の軍団のうち、ほぼ一個軍団に掃討する悪魔が消滅、その中には軍団長一人と上級悪魔が十三体含まれています。

現在味方は、各地で総反撃を開始した敵に対して散発的な交戦を繰り返しているばかりです。ご指示いただきませんと、戦線は押される一方です」

それでも寝ぼけ眼の『ワーム』は何の自覚もないようで、のんびり惚けた口調のまま気の抜けた返事をする。

「ルポレットはどうしてるのさ。彼に任せているんだけどなあ・・・」

大きな欠伸をする。

「ルポレットさまは前後策の為に外かけておいでです」

「いない・・・ふん、いないんだ・・・いない・・・って、ええええ！」

三度自分の口で繰り返してようやく何事が起こっているのか気がついていらしい。

寝床から飛び起きた『ワーム』はすぐさま歩き出した。

水晶球が安置された遠距離に思念波を送る部屋へ向かっているのだと、秘書はついて行きながら理解した。

「軍団長一人と上級悪魔が十三体、

そして軍団一個分・・・って六千体が消えたって事か・・・なんでそんな事態になるまで報告しなかったのさ！」

「・・・よくおやすみになっていらっしやいましたので」

「戦力の五分の一以上が失われるなんて緊急事態だ。気づかないなんて無用じゃないか」

「寝ぼけて何体かの悪魔を再起不能にされましたが・・・」

それで今まで起せなかったのだと言外に言われて、『ワーム』はばつが悪そうに口をつぐむしかなかった。そして先を急ぐ。

「で、ルポレットの前後策とやらは一体なに？」

「それに関しまして、先ほどルポレットさまから思 念波が届いたようでございます」

「じゃあ、直接彼に聞いた方が早いかな」

『ワーム』が眠っていた部屋の階下に位置する広間に入る。増幅器である水晶が輝いている。広間の中空で像が浮び、慇懃なルポレットの姿となった。

「おはようございます、閣下」

相変わらずルポレットの顔からは何の表情も窺えない。

「嫌味かい？」

苛立ちを隠せない『ワーム』だったが、ルポレットは平気なものだった。

「嫌味と受け取られたのであれば、ご自分にとって疚しいところがおありなんですか？」

「疚しいも何も、目が覚めたら戦力が五分の一も削られている。慌てるのは当然だろう」

「ほ、まだ五分の四は残っている訳ですね。それならまだまだ勝算はありますが、時間との勝負ですな……」

「諸族のアンゲルウルプ攻略軍は崩壊、戦線は一転して後退する一方。で、ルポレット、君はどんな前後策を目論んで勝手に留守にしたのかな？返答次第では温厚な僕でも怒るからね」

少年の姿をした『ワーム』の姿が一瞬揺らぎ、その瞬間に漏れ出た彼本来の力を感じて側に控えていた悪魔たちは怯える。人間の少年の姿はまやかした。その本体は地獄の諸君主に匹敵する力を持った『地獄の先触れ』なのだ。

だが遠く離れた場所から通信してくるルポレットはまったく動じない。彼は淡々と話を続けるだけだ。

「その前に、閣下が眠っておいでの間に行進した事態の説明をさせていただきますでしょう。」

テッラムリアの状況はご理解いただけたと思いますが、主戦線で動きがありました。

天使側が各戦線より戦力の抽出を図っています。まもなく集結が完了しテッラムリアに向けて進軍を開始するでしょう。その数、推定で十個軍団です」

「なんでそんなにやってくるのさ。テッラムリアに展開しているのは僕の配下、五個軍団だけだよ？どんな無理して倍の数をかき集めたんだか……」

「これは推測ですが……おそらく『天使王国』側が閣下の存在を垂れ込んだのではないのでしょうか？なんだかんだ言って、閣下はご自分の存在を彼らに仄めかしていましたからな」

「そんなあやふやな情報で十個軍団もかき集めたのか……連中は阿呆か。」

いや、まあ主戦線にとってはそれでいいのか。僕がちゃんと陽動を果たしたという事で結果オーライでいいよね。それで、我が軍は主戦線で攻勢に出たのかい？」

「ただいまそれを企画中です。ですがテッラムリアにおける閣下の侵攻をお助けしようとする、この攻勢ができるかどうか微妙なのですが……閣下、やはりここは援軍を求めない方がよろしいですかね？」

ルポレットは何の抑揚もつけずにあっさりと言う。

建て前としては陽動に反応して主戦線を手薄にした天使側の隙につけいべきであり、ここで味方に援軍を求めるといのは本末転倒かも知れない。

しかし逆に考えれば、今援軍を回してもらえばテッラムリアを一気に制圧して、備えない天使側戦線の内側から攻撃する事ができる。

うまく主戦線と挟み撃ちにできれば、『善』と『悪』、天使と悪魔の戦争において転換点になる可能性があった。

だが、もちろん味方がただで援軍を寄越す事などありえない。悪魔の善意など言うだけ無駄だし、寄越した援軍で『ワーム』が戦功たてるのを指をくわえて見ているような者が悪魔である筈がない。

その見返りを払いたくないが為に『ワーム』は子飼いの戦力だけでテッラムリア侵略を遂行してきたのだ。

それもここへ来て限界になりつつあるようだ。

五個軍団三万のうち六千を失い、それ以上に軍団の核となるべき上級悪魔は合計十八体失われている。

そこへ味方の倍以上の敵がやってくるというのだ。いかに『ワーム』単体の戦闘力があるうとも、数の暴力にはかなわない。

ここにきて撤退という選択肢はなかった。

数百年かけた謀略の失敗と手持の戦力の損耗という赤ッな決算しか残らない。

そうなれば『ワーム』自身のヒエラルヒーが下がるのは当然だ。そんな事ができる訳がない。

逡巡はしばらくだったが、『ワーム』はすぐに決断した。

「戦に負けるのはご免だな。援軍を請おう。その交渉に行っているんだろ？」

「まあ、話は通しましたが、後は閣下とお話したいと、そう陛下は申されましたね」

ルポレットは地獄の諸侯ではなく官僚である。

高位悪魔に対して尊称をつけるのが習いだが、しかしそれにしても彼がポロつと漏らしたそれに『ワーム』は嫌な顔をした。

『陛下』？」

「はい。近隣で最大兵力を擁する方と話をした方が良いと思いましたが、南東方面軍総司令官でいらっしやいます、

君主位第三位アヴィドピグロ陛下のところに参加しました。陛下は是非とも閣下とお話をされたいと申されて。はい」

『ワーム』は実に渋い顔をした。ここまで渋い顔を見せたのは初めてかも知れない。

「よりによって、あいつかよ……」

「もったも最奇りの最上級指揮官でいらっしやいますから」

「もうちょっと、どうにかならなかったのかよ……」

「申し訳ありません」

そう詫びるルポレットからは、まったく誠意が感じられなかったが。

「……解った。つないでくれ」

「御意」

ルポレットに変わって現れたのは、一見すると退廃した雰囲気を漂わせた貴族的な装いの青年だった。物憂げそうに深々と椅子に座り、高々と足を組み上げ、優雅な手つきで瀟洒な杯などを弄んでいる。どこからどう見ても人間の、早々にこの世の楽しみを味わい尽くして、いかにも人生を退屈に過ごしている耽美な青年貴族にしか見えない。

だが相手の正体を知っている『ワーム』には、それが言わばかさぶたみたいなものが取っている擬態に過ぎないという事を承知している。

アヴィドピグロの本体は青年の姿をしたものが座っている椅子の、その後ろ側についている巨大な脳髓だ。手足など一切ない。合計で十六の人格が一つの脳に共存している複合人格。それが悪魔としてのアヴィドピグロの正体だ。

肉体的な戦闘能力はなきに等しい。その代わり強力な思念波を持ち、上級悪魔はおろか、時には軍団長級の悪魔でさえもその精神を支配し、意のままに動かす。

単体で圧倒的な力を誇る『ワーム』とは対極に位置する存在だ。だから苦手なのかも知れない。

そんな彼の考えを見透かしているのかどうか、アヴィドピグロの擬態は嫣然と笑って見せた。

「久し振りだね、『地獄の先触れ』」

「陛下もお変わりなく」

先ほどまでの無然とした顔をつるりと変えて、『ワーム』も愛想良く微笑み、丁寧な礼をした。

実際どう思っているかはさておき、地獄の宮廷序列ではアヴィドピグロの方が断然上である。

秩序を重んじる悪魔の端くれとして『ワーム』も礼を尽くさなければならぬ。

「話は君の部下から聞いたよ。陽動が成功したそうだね。まずはおめでとう。これで私の正面が随分楽になるだろう」

アヴィドピグロは地獄の軍勢の南東方面軍総帥として五十にも及ぶ軍団を指揮下に置いて、天使の軍勢と絶え間ない闘争を続けている。推定十個軍団が敵の戦線から引き抜かれたのだ。

全面攻勢をかければ、戦線を押し上げる事が可能だろう。指揮官ならば自軍に有利な戦況の変化は歓迎する。

だが『ワーム』はこれから、その彼に敵につきあつて兵力をこちらに回してくれと頼まなければならない。『ワーム』は知らずに唇を舐めた。

「それに関してお話があります、陛下。今私どもが蹂躪しているテッラムリアは完全に敵戦線の内側であります。ここに直接の侵入路が存在するという事は、無防備な敵の後背を襲撃する絶好の機会ではないでしょうか？」

弱体化した敵正面を攻撃するというのも一つの手段でしょう。

しかし戦力を引き抜いたからには敵には相当の備えがあると見なければなりません。

強襲すれば却って手痛い損害を受けるかも知れません。

それよりも早急にテッラムリアを突破し敵後方を蹂躪、占領地を増やす事の方が、戦線に劇的な変化をもたらすではありませんか？」

アヴィドピグロの擬態は優雅に杯を干した。

何が入っているのかは知らない方がいい代物だという事は『ワーム』にも解っている。

相手の本体には内蔵すらないのだ。

十六の人格・・・正確に言えば悪魔格だが・・・それらが絶えず脳髓の中で議論し、無数の闘争と和解を繰り返したあげく、一つのアヴィドピグロという人格を形成して行動しているなど、元から単体の『ワーム』に理解できる事ではなかった。

杯を飲み干すという行為が、彼、もしくは彼らの思考にどういう意味を与えるのか、それは解らない。だがアヴィドピグロはあらかじめ答えを用意していたように、あっさりと返事をした。

「確かに魅力的な申し出だが、しかしそれでこの私にどんな利益があるというのかな？テッラムリアに潜伏し、次元穴を開通させ、敵に対する陽動攪乱、もしくは侵攻拡大を行うのは、君が請け負った命令だよ。私はここで数十個軍団の敵と睨みあって数世紀といったところだ。

もし君の要請に従って兵力を回しても君の手柄になってしまつては意味がないのじゃないかね？」

「お言葉ですが、陛下。そのような不義理をこの『ワーム』がするとても？私は誠心誠意の龍であると評判なのですよ。南東方面の総司令官は陛下です。この地域の戦功が全て陛下のものである事は、自明の理ではありませんか」

予想された返答だけに『ワーム』も落ち着いて言葉を返す。しかしアヴィドピグロの擬態は欠伸をしながら聞き流した。

「そうだとしてもねえ。既にテッラムリアには天使の軍団が十個転出、急行している。

我方は・・・言つてはなんだが君が眠りかけている間に随分遅れをとつてしまつたようだ。

強力な戦闘個体である君がてこずるような世界をだ、私が十個軍団派遣したところで確実に確保し、なおかつ天使の軍団を迎え撃つだけの勝算があるのかね？」

はつきり言えば、私が子飼いの軍団を投入する利益は、何処にあるのかな？」

「戦功は陛下のものでありますよ」

「ああ、そういう世迷言じゃないんだ、『ワーム』。こう見えても私は忙しい。

何せ五十個軍団を僅か十六個の意思で統率しなくてはならなくてね。

擬態は優雅に構えているが本体はかなり忙しく頭を働かせているのだよ。頭だけじゃないか、という突っ込みはナシでね。

『ワーム』、君は手持ちの軍団がテッラムリア在住の定命たちにボロボロにされた上に、

敵には君の手持ちの倍の天使の援軍が到来するという。とてもじゃないが勝ち目はない。

私が兵力を提供しなければ、まず無理だろう。

で、私に十個軍団を派遣して欲しいというならば、君は一体いくら払うのかね？」

回りくねつた思考の持ち主が、こうも直截に尋ねてくるとは思わなかつたので、

『ワーム』はらしくなく下手な言い逃れをってしまった。

「金ですか？」

「あいにく私は金属にそれほど興味はない。興味があるのは、君がテッラムリアで荒稼ぎした魂さ」

率直に言われて『ワーム』の笑顔が強張り、眉毛がひきつる。

確かに貴金属だろうと宝石だろうと、光り物が好きな龍と違い悪魔にとってそれは単なる物質でしかない。

しかし魂は違う。彼らにとっては通貨であり力の源泉だ。

いくつの魂を取り込んだかによって、悪魔の力と地位は決定されるといっても過言ではなく、

だからこそ『ワーム』もがめた魂をそのまま温存して我が物にしようと目論んでいる。

ルポレットが漏らしたのか、それともアヴィドピグロが勘付いたのかは解らない。

無駄な足掻きと知りつつも『ワーム』はしらばっくれた。

「はて、荒稼ぎですか？生憎私めはそのような機会に恵まれておりませんが」

「テッラムリアにおける一国家分の魂を我が物にした事ぐらいお見通しだよ」

「それは次元穴開通、維持に使用しています」

「その割には随分脆弱な次元穴だ。」

ちよいと負荷をかけてしまったら消滅してしまうような代物に、君が何十万もの魂を費消するとは思えないね。

『ワーム』、君は私がどんな存在なのか知っている筈だ。本体である巨大な脳髄は何もできない。

我が身の大きさを持って余して転がっているだけだ。しかし私は他者の精神を支配し意のままに動かす事を得意としている。居ながらにして全てを知る事は、私の十八番だよ」

やはりルポレットがアヴィドピグロに支配されたのだろうかと考える。だがそれを見透かすように擬態は笑った。

「支配するのに骨が折れる君の副官殿になんか手を出さないさ。頭の構造が単純な者はどこにでもいる。

ましてや眠りこけて配下の管理を怠っていた君の軍団に手のものを忍び込ませるのは簡単な事。そうじゃないかね？」

そう言われれば、そうである。『ワーム』には自分の力を過信しすぎるところがある。

盗聴、透視の危険に備えもせず重要な事を喋る事もある。結局自分が迂闊なのかと臍を噛むよりしかない。

何を言っても無駄だと観念した『ワーム』は、とつとつ話を進める事にした。

「十万」

突然口火を切る。しかし心得ていたアヴィドピグロはいなすように言った。

「三十万」

こいつ、僕が確保した魂の数を正確に知っていていやがるな。

上限一杯の値を口にしたアヴィドピグロの擬態を眺めながら、しかし『ワーム』は怯みもせずすぐに次の値を口にした。

「十二万」

「二十五万」

『ワーム』が上げた値よりもアヴィドピグロが下げた値の方が大きい。

これはすぐに決着がつくかも知れない。次の値を言う。

「十二万五千」

「二十万」

「十二万八千」

「十八万」

「十三万」

「十六万」

「十三万一千」

そう『ワーム』が口にしたところでアヴィドピグロは欠伸をした。

「やめようか」

「は？」

「いやぁ・・・『ワーム』ともあろう者がここまで細切れに値を出すとは、と呆れてしまつてね。

まあ、テッラムリア侵攻は君の戦だ。私の、じゃない。そろそろ飽きてしまつたよ。

これ以上時間を潰すのも本意じゃないし、手持の戦力でせいぜい頑張りたまえ」

結局のところ、これを言い出されたらおしまいである。

確かにテッラムリアを攻略し、そこ足がかりにして天使の領域を侵す事は大きな戦功となるだろう。

だがアヴィドピグロにしてみれば、興味はそそられるが余計な仕事に過ぎない。気が乗らなければ断れば済む事だ。

慌てるのは数百年かけた策略の成否にかかわる『ワーム』の方だった。

「解つた、解りました！十五万でっ」

アヴィドピグロの擬態はしばし思案する様子を見たが、やがて優雅に微笑んだ。

「まあいいだろう。あんまり君を怒らせると後が怖いからね。魂十五万個で手を打つよ。

私の手元にそれが届き次第、援軍を進発させる事にする。早めに動く事だよ、『ワーム』」

像は再びルポレットに変わる。彼はまったくの無表情で言ったものだ。

「おめでとうございます、閣下」

「何がめでたいって？がめた魂の半分を取られるんだよ、ぼかぁ」

「それでも、援軍が間に合えば決定的な敗北は避けられます」

「確かにそりゃそうだけど・・・ああ、くそつ。何でこんな事になったのかなぁ」

「ウロロトス敗北の原因は私には解りません。早急 に分析なされるのがよろしいかと思えます。

私は援軍十個軍団とともにテッラムリアに帰還いたしますので、それまで持ちこたえて下さ」

「ああ。高値で借りた軍勢だ。最精鋭を選抜するように言ってくれよ」

「アヴィドピグロ陛下の完璧な支配下にある軍団にどう干渉すればいいのか、まったくもって解りませんが、努力はしてみましよう。閣下もご武運を」

『ワーム』はルポレットの言葉を鼻で笑った。

「軍勢は危機に陥っているかも知れないが、天使の軍団が到着するまでの間に僕に危害を加えられる存在がテトラムリアにいるとは思えないけどねぇ」

しかしルポレットはそれに同調しなかった。そして考え深げに言うのだ。

「・・・そうでしょうか。本当にそうなら安心なのですが」

「どうということだい？」

「ま、それは戦況を詳しく分析すればお解りになるでしょう。魂十五万個の到着、心よりお待ちしておりますよ、閣下」
そういうとルポレットは『ワーム』が止めるのも聞かずに消えてしまった。

自分の口から説明したくないのか、他に急ぎでやる事ができたのか・・・『ワーム』は理由を前者だと思った。

「ケルマディクとベレスコの敗戦、分析しているんだろ？」

『ワーム』は傍らに控えていたルポレットの秘書に問う。

「はぐ」

「で、敗因はなんだって？」

「どちらの戦場でも『城砦落とし』と呼ばれる天使の眷属によって戦局を左右されております。

それに軍団長一人と上級悪魔十体は確実に、この『城砦落とし』によって消されています。

ベレスコ戦以後、『城砦落とし』の姿は目撃されていませんが、これは確実に脅威であると思われる」

もはや上機嫌な『ワーム』は何処にもいなかった。

眉毛をひくつかせ、奥歯を噛み締めている彼は、怒りの為に自分の本性を暴露しそうになっている。

『『城砦落とし』だって？あの小娘の為に上級悪魔が十体も失われた？その上、戦局まで左右しただと？

信じられん。信じがたい馬鹿げた話だ」

「しかし、事実であります」

腹立ち紛れに否定したところで、どうなる訳でもない。

『ワーム』は軍団の情報網に思念波を送り、今までの戦績を、つまり部下たちの分析を検証する。

確かにそれは否定できない事実だった。

一挙にケルマディク陥落を狙った軍団長カプノーザを一騎打ちで破り、

続くケルマディクの攻防戦でも圧倒的戦闘力を見せ付ける。

極めつけはベレスコ戦で、彼女一人の突撃の為に味方の左翼は崩壊し、本陣も壊滅している。

残されたホブゴブリンの重装歩兵も悪魔たちも敢闘したが、背後を取られてはどうしようもなかった。

苛立たしく舌打ちをする『ワーム』だが、腹を立てるばかりでは何の解決にもならない事も弁えている。
深呼吸一つで何とか怒りを押さえ込み、控える悪魔に尋ねた。

「それで、味方は戦線を維持しながら後退しているのかい？」

「ご指示がありませんので、それ以上の命令を下す事ができません」

「解った。じゃあ、全軍団に通達だ。残った全ての戦力は持ち場を放棄。次元穴周辺に防衛線を張る。」

どうせ広く浅く広がって各個撃破されているんだろう・戦列を組みなおせばテツラムリアの定命どもに遅れをとる我々じゃない。とにかく、十日も次元穴を守りきればこちらの勝ちだ。

それを全軍に徹底させろ。まだ戦いは終わっていない。決戦はこれからだと」

「は。ではそのように」

しかし引き下がろうとする部下を『ワーム』は押し止めた。

「さて。命令の追加だ。『城砦落とし』を発見しても一切、手を出すな」

「は？よろしいのですか」

「残念ながら僕の配下には、あの小娘に対抗できる駒がない。

軍団長すら倒されたんだろ？なら、わざわざ殺される為に攻撃する事はない。軍勢は定命の存在にこそ脅威を持つんだ。わざわざ数を減らす必要はないさ」

「しかし、『城砦落とし』が敵の中核として現れるのは確実ですが・・・」

「それはないだろう」

『ワーム』は部下の意見を鼻で笑った。

「確かに奴らには天使の援軍がやってくる。しかしそれはこちらの時間で十五日後だ。

こちらの援軍は十日前後で到着する。数日の差でこちらの勝ちだな。奴らがそれを防ぐにはどうするか。

手っ取り早く次元穴を塞ぐより仕方ないだろう。奴はまっすぐここを狙ってくる。確実にな」

「しかし、それは・・・」

「だから、僕がこの次元穴を守るのさ。『地獄の先触れ』たるこの僕が。他の奴は邪魔だから、全て防衛戦に回すといい。

この劣勢は、今まであいつを甘く見た僕の落ち度だ。それを僕が贖おうっていうんだよ。

それとも、僕が、役付き熾天使でもない、まがい物の天使の眷属とやらに負けるとでも思うのかい？」

笑顔の『ワーム』の目は笑っていない。

それに圧倒されて部下は押し黙った。その気になれば、

あつという間にテツラムリア全土を蹂躪できる破壊力を持った『ワーム』自らが『城砦落とし』に立ち向かうというならば、何の異論もなかった。

部下が去った後、『ワーム』は鐘楼の最上階に登った。天は厚い雲で覆われて、その中に幾つもの稲光が走っている。次元穴の周囲には荒涼とした荒野が広がるだけだ。彼は彼女がやってくるだろう北を見て呟いた。

「お望み通り決着をつけよう、『城砦落とし』。今から思えば、とっとと殺しておけばよかったよ」

後悔に満ちた溜め息一つ、彼は漏らした。

ベレスコ戦の後、人間、ドワーフ、エルフなどの諸族の軍勢がやすやすと勝ち戦を収められた訳ではなかった。そもそもベレスコ戦とて無傷で勝てた訳ではない。

ホブゴプリンの戦列兵を相手に戦った重装歩兵達は、まだこのテッラムリアの常識が通じる敵と戦ったので、本陣を失い、左翼から騎兵の突撃を受け、混乱して戦意を失った彼ら相手に一方的な殺戮を演じる事さえできたが、悪魔の大隊と戦ったエルフと人間の重装騎兵たちはそうはいかなかった。

悪魔はテッラムリアの諸族よりも階級支配がしっかりしている。いや、上に立つものの命令は絶対なのだ。それにいかに精鋭の重装騎兵といえども個体戦力が悪魔にまさる騎士など、そうそういるものではない。

壮絶な殴り合いの末、掴んだ勝利だが、代償は余りにも大きく、

一万を数えた重装騎兵の半分は死傷し、しばらく戦場に立つ事はできなかった。

だが、だからこそカシユール・フォリヴァースとトマス・ウォレンサーは、休む事なく戦いを継続させた。

アンゲルウルプ攻略の中核であった諸族の軍勢を失い、悪魔の軍団は大隊単位で広く薄く戦線を入っているだけだ。下手をすれば数体の悪魔で行動している部隊もある。

ベレスコ戦での被害が比較的少ないドワーフの重装歩兵を中心に、『天使王国』の軍勢は分散した悪魔の軍勢の、もっとも小さな戦術集団を狙い撃ちして攻撃する戦法を取ったのだ。

ケルマディク攻略失敗、ベレスコ戦の敗北で悪魔たちは五千体近く数を減らしている。

今現在テッラムリアに展開している悪魔の総数はおおよそ二万五千。数にしてみればその程度なのだ。

それを随時攻撃して数を減らし、弱体化させ、そこへ天使の援軍をぶつけて確実に勝利を得る。それが彼らの基本戦術だった。

もちろん悪魔に対して有効な攻撃手段が少ない定命の者たちが、

何故、天使の援軍が到着する前から無茶をして戦わなければならないのか。

危険な対悪魔の戦闘の主力となるのは、やはり天使ではないか、という意見もあつたが、しかしカシユール・フォリヴァースは言った。

『天使王国』の支配を天使達に委ねるのか？確かに彼らは良き支配者であり、公正な法の執行者となるだろう。

だが所詮は『よそ者』である。二百年前に彼らが立ち去った後、彼らの支配に依存していた我らの先祖はどんな道を辿ったのか。振り返れば解る筈だ。

我らの事は我ら自身で決めるべきだ。自分たちの王国を作り上げ、生きていく為に、彼らが到着する前に少しでも戦果を、自分たちの勝利を積み重ねるのだ。

我々は支配されるだけの羊ではない。我らの支配者は我らのみなのだ。

彼の言葉がどれほど人々の心に響いたのか、それは解らない。

だが天使達の支配を失い緩やかに混乱と解体の道を辿った歴史は、心ある者には常識になっている。

自分たちの世界は自分たちの手で、平和を、秩序を作り出さなければならぬと、そう自負し考える者も少なからずいた。

ともあれ、『天使王国』の旗の下に集まった諸族の軍勢は悪魔たちを各個に撃破し、ゆっくりとその戦線を押し上げつつあつた。フォリヴァースたちは知る由もないが、ルボレットが不在、『ワーム』が眠りこけ、指揮系統が混乱していた悪魔たちは、その攻撃に有機的に対処できなかつたのだ。

それがある日突然、影も形もなく消えた。人々は気の早い勝利を祝つたものだが、フェイスエシルは冷静だった。

「ただ撤収して戦線を縮小しただけよ。連中、自分たちの命綱になったメルクスの次元穴を、いよいよ総力上げて守るつもりよ。おそろく天使の軍団が動き出した事を察知したんじゃないかしら。そろそろ大詰めね」

人間、エルフ、ドワーフを始めとする諸族の諸侯、

そして善なる神々の神殿に仕える僧侶、神官、聖騎士団の面々が軍を再編成しメルクス跡地への侵攻を図る中、ポルメリアだけがカシユール大公の命令でフィスエシルの下に回されている。

またまた悪魔との戦場ではなく、この気ままな天使とエルフの血を引く姫君、

魔術師に振り回されなければならないのかと、ポルメリアはうんざりしていたが、

どんな手段でも使って悪魔たちをテツラムリアからたたき出す覚悟を固めたフィスエシルには、そんな気配は微塵も感じられなかった。

「カシユールとトマスは、各地の諸侯とも連絡を取り合って残存している戦力でメルクス跡地に正攻法で攻めるつもりよ。当然悪魔の軍団は何としても次元穴を守ろうとするから、戦いは熾烈を極めるわね」

「それなのに、何故私が貴女の下に回されるのです？」

『天使王国』はおろか、テツラムリア全土を探してもポルメリア以上の『悪魔殺し』は存在しない。

上級悪魔はおろか、それよりも強力な軍団長級の悪魔さえ倒す彼女が、このメルクス侵攻の軍から外れるとは考えられない事だ。

フィスエシルは、ポルメリアと彼女の向かうところ何処にでもついてくる吟遊詩人のデイエス連れて倉庫へと向かった。フィスエシルの弟子達も何人かついてくる。

彼女とその弟子達は、ポルメリアの質問に面と向かって答える時間も惜しいというように倉庫の中を引つ掻き回している。フィスエシルも大きな道具箱に頭から突っ込みながら答えた。

「正攻法に攻め込んで行ったら間に合わないからよ。数が減ったといっても、悪魔たちはまだ二万五千はいる。

その防衛網を食い破る為には、私達は少なくとも倍の戦力を用意しなきゃならない。

ところが、そんなものをおいそれと用意できる諸侯が今現在いると思う？」

ベレスコ戦にいたるまでの小競り合いで多くの人が死に、会戦そのものの消耗も馬鹿にならない。

その後の総反抗でも更に多くの戦士たちが倒れた。

悪魔と戦うのだから雑兵はいらない、精銳をそろえなければならぬ。それでも五万はないと苦しいわ。

激しい戦いが続いた後だもの。すぐさま揃えられると思うほど楽観的にはなれないわね。

その間にも悪魔の援軍はこのテツラムリアを目指して進撃中よ。恐らく数日の差で天使の軍団よりも早くつく。

そうになったら、テツラムリアで悪魔の十五個軍団と、天使の十個軍団の世紀の決戦が見られるというわけ……。

それがどんなものになるか、想像できるでしょ？」

悪魔は地獄の炎を主武器として使うのに対して、天使は天上の雷撃を使う。

一撃で普通の人間なら何十人もなぎ払えるそれらを、彼らは振り回して戦うのだ。

『天使王国』はもとよりテツラムリア全土が荒廃し、場合によっては滅亡してしまうかも知れない。

「カシユール大公の軍勢が間に合わないとしたら、貴女はどうされるのです？」

だがポルメリアの質問にフィスエシルは質問で返した。

「貴女ならどうする？」

ポルメリアは躊躇いもせず答えた。

「私一人でも次元穴を塞ぎに参ります」

「さすがね」

フィスエシルは箱からようやく目的の物を見つけたらしく、それを引っ張り出しながら振り返った。満足そうに笑っている。だがポルメリアは笑わなかった。

「しかしベレスコ戦の前に私がそれを行おうとして、貴女は止めた。今度はそれをやらせる。どうしてです？」

「決まっているわ。諸侯の軍勢が陽動となって悪魔たちの注意を引き付けるからよ。

いかに悪魔たちでも自分たちの倍の軍勢が向かってきたら、総力を上げて迎撃せざるを得ないでしょう。

必然的にメルクス周辺は手薄になる。そこへ貴女が切り込んで次元穴を潰せば、この戦いの終わりが見えるというものよ。

でもね、今のままの装備で行かせる訳にはいかないわ」

「何故です？」

「何故って、呆れたものね。次元穴は悪魔たちにとって戦略の要よ。

当然ラスボスの『地獄の先触れ』が守っているに決まっているじゃない。

貴女には、奴を確実に倒してもらわなければならない。だからできる限りの装備はもっていてもらうわ。

あー、ちょっと剣を見せて」

言われてポルメリアは一瞬ためらいを見せたが、アルバルに鍛えてもらった白金の大剣をフィスエシルに委ねた。重たいそれを抱え込んでフィスエシルは危なっかしく抜いたが、その刀身を見るやいなや、満足そうに笑った。

「うん。これならいいわ。使い手次第で悪神の実体化したものでも倒せそう。いい剣だわ。

じゃあ武器の心配はないと、問題は鎧ね。あー、下級神に匹敵するような力を持っている『地獄の先触れ』相手には役不足ね。

貴女、自分の治癒能力に自信があるから、鎧とかなおざりにしていない？」

「そんな事はないと思いますが・・・」

戸惑いながらポルメリアは自分の着用している鎧を眺める。

許す限り金を投資して極限まで防御力を高めた鎧のはずである。だがフィスエシルの目から見ると不十分なようだった。

「奴は地獄の炎とともにあるのよ。貴女の治癒能力が炎のダメージ回復に使われちゃ勿体ないわ。

これは『マフスフの鎧』。炎に対する完全耐性を着用者に付与するの。こっちは『聖マイアの指輪』。

悪の属性を持つ者と戦う時に防御力をあげてくれる。それから、これは身かわしの指輪。

奴の炎の息や爆発呪文から逃れやすくなる。他にも貴女の防御力をあげる道具が色々あるのよ・・・」

フィスエシルは箱の中からいくつもいくつも、それぞれ伝説の中にしか存在しないような魔法の道具を取り出してくる。実用性を重んじ、伝説や説話にはとんと疎いポルメリアは淡泊に見ているが、デイエスにしてみれば目の保養である。

巷では実物を見る事など不可能な品々を目の当たりにして、どうしていいのか解らない喜びに浸っていた。

だが実際に手に取っている彼女たちは極めて実務的で、デイエスの興奮などまったく目に入っていなかった。

「ま、装備で補うのはこんなところね。次は薬よ」

「えっ」

「貴女の回復力は確かに尋常じゃないけど、一夜で一国を滅ぼすような『地獄の先触れ』相手に対抗できるほどじゃないわ。攻撃を受けた端から回復していかないと話にならない。」

今、弟子達に言っておりつたけの薬を持つてくるように言っておりあるから・・・ああ、来た来た」

エルフの少女と人間の女性が二人で大きな籠を一つ運んできた。籠にはぎっしりと薬瓶がつまっている。

二人は師匠であるフィスエシルの側にそれを置くと、あたふたとまた部屋から出て行った。

どうやら、まだ運ぶものがあるらしい。

「さて、薬の説明をするわよ。そこの吟遊詩人の坊やも聞きなさい」

「は、はっ」

突然呼びかけられてディエスはドギマギするが、フィスエシルもボルメリアもそんな事、まったく見えていないようだ。

「いい？これは炎に対する耐性をあげる薬。これは坊やが飲みなさい。」

それからこれは受けた傷を全快にする薬。一つだけ坊やが持つていて、残りは全部ボルメリアが持つていなさい。

この使い方で勝負が決まるわよ。気をつけなさい。

これは透明化の薬。

視覚に頼らずに世界を見ている龍の一族にどこまで通じるか解らないけど、飲んでおけば出会い頭に殺される事はないと思うから、坊やが持ちなさい。

あとは・・・幸運をあげる薬とか、速度をあげる薬とか・・・そんなとこかな」

籠一杯の薬瓶の説明を聞き終えて、ボルメリアとディエスは顔をあげる。しかしそれで終わりではなかった。

先ほど出て行った二人の弟子のうち、エルフの少女は巻物のつまった鞆を、人間の女性は数本の杖を運んできた。

「ありがとう。」

この巻物は私と私の弟子達の心づけよ。いろいろ便利な呪文が書き込んである。

吟遊詩人の坊やに魔術師の呪文を何処まで使いこなせるか解らないけど、必ず役に立つから。

それから、杖には回復呪文とか、もっかい殴らせる呪文とか、色々小ネタに使えるものが仕込んであるから、これも使いなさい。

さて、こんなところかしらね」

ようやく終わったフィスエシルの説明を聞いて、改めてボルメリアとディエスは自分たちの目の前に広げられた品々を見渡した。まるで魔法の道具屋を明日にでも開店できそうな物量だ。ディエスは目を輝かせ、そしてボルメリアはやや呆れていた。

「少し大袈裟では？」

「何言っているのよ。相手は下級神にも勝るとも劣らない存在なのよ。」

貴女一人、お供は半人前の吟遊詩人だけやらせるこちらとしては、どれだけ装備をもたせても足りないくらいよ」

「しかし、これだけの装備を買い取るお金など私には・・・」

「それが無理なのは解っている」

「では・・・」

「でもあげるつもりはない」

「ええ！」

フィスエシルの言葉を意外なものと取り残念そうな悲鳴をあげたのはディエスだった。フィスエシルとポルメリアはそんな外野の声を無視している。

「必ず返しにいらっしやい。伝説級の武具だけじゃないわよ。」

使った薬も、巻物や杖に仕込んだ呪文も、金銭に換算して構わないから、返してもらおうわ。

だから貴女は、必ず生きて帰るのよ」

善なる存在にあるまじき欲深な発言をフィスエシルは繰り返したが、最後の一言を聞き、ポルメリアは微笑んだ。

「・・・そうですね、大きな借りだ。必ず返さないと」

「そうそう。借りた物はちゃんと返してもらわないと。じゃないと泥棒になってしまっわよ」

「期限はあるのですか？」

「え？」

「返済期限です」

ポルメリアは相変わらず微笑んでいる。彼女の口から冗談が出るなどと思わなかった。フィスエシルは一瞬言葉につまり、ポルメリアの表情を見て笑った。

「そうねえ・・・『悪』を倒して稼ぐのが貴女のやり方なんでしょう？ところが倒すべき悪魔どもときたら、しみつたれた連中で、倒されたら何も残さずに消えてしまうだけ。これじゃ貴女の収入は当分ないわね」

「そうですね」

「いいわ。世の中が落ち着いたら、その件については一緒に考えましょう。」

あ、借金のかたに残りの一生を私の側仕えで送る、というのもアリよ」

「それは怖いですね。ご免被ります。何とか返せるようにお金を稼ぐ方法を考えます」

「そつ。そりゃあ、残念」

二人の、天使の属性を持つ娘は声を立てて笑った。一人はこれから死地に向かう。

もう一人は死地に送り出す。それなのに、二人からは少しも悲壮感というものがなかった。

「準備ができ次第、出発しますね」

「そう。あ、巻物の中に幻影の馬を使役する呪文があるわ。普通の馬の四倍は早く走るから、使いなさい」

「はい。色々ありがとうございます。またお会いしましょう」

「そうね、貴女の借金について話し合わないとね」

二人は再び声をあげて笑った。

しかし、その日のうちに出発準備を終えたポルメリアの顔には一つも笑みはなかった。

デイエスが巻物の呪文を読み上げ、幻影の馬が出現する。

ポルメリアもデイエスも体重は軽いから、一頭に二人乗りをしても問題なかった。

ポルメリアはまったく気にしていないが、彼女の体に手を回さなければ体を支えられないデイエスは顔を真っ赤に染めている。最初は鞍の端を掴んでいようとしたが、それでは振り落とされてしまうと彼女に注意されて、やむなく彼女に抱きつく。

何処となく甘い彼女の香りに当てられて、デイエスはのぼせ気味だが、ポルメリアにはそんな彼を気遣う余裕はなかった。

メルクス跡へ進撃する軍勢の編成で混雑しているアンゲルウルプに彼女達を見送る者はいない。

フィスエシルも次なる画策に弟子達を指揮しているのだろう。ポルメリアにしてみれば気楽な事だった。

「行くよ」

しがみついているデイエスに一声駆けて、ポルメリアは幻影の馬を駆った。

地上よりやや浮んで走る幻影の馬は、文字通り飛ぶように走っていく。

デイエスにしてみると聞こえるのは風の音ばかり。

走りぬける幻影の馬が速すぎて、周りの景色は眺める事もできずに後ろへ去っていく。

ポルメリアも無言で手綱を握っている。魔法で出現した馬だから、騎乗するのに特に難しい事はなかった。

拍車をかけても速度が上がるといふ訳ではない。

だが彼女は難しい顔で前方を見据えたまま、しがみつくデイエスに話し掛ける事もしない。

もともと風の音がうるさくて大声を出さなければ聞こえる事はないだろうが。

夕闇が迫る頃、ようやく幻影の馬が速度を緩めた。

ベレスコの会戦跡地も遥かに通り過ぎて、道程の三分の一はこなしただろうか。

馬が立ち止まったのは何でもない小川の川辺だった。

辺りを見渡しても人家の明りはない。空にはどんよりとした雲が覆っている。

火を起こし二人は簡単な食事を取る。そこで初めてポルメリアは口を開いた。

「・・・今更なんだけど、本当に良かったの？デイエス」

「え？」

「私と一緒に行くという事は、一国を一夜で滅ぼした怪物と戦うという事。

生きて帰る保証は何処にもないわ。貴方はここから引き返す事もできる」

「でも・・・ポリーは呪文の巻物を読めないでしょ。僕がいないと、さっきの馬を呼び出す事もできないよ」

「それはいいのよ。あと道程は三分の二。あまり早く着き過ぎると悪魔の軍勢の鉢合わせしてしまう。

連中が諸侯の軍勢と接触して気を取られているうちに、メルクスに向かうつもりだから、ここからは少し歩くつもりよ。」

正直、一国を丸ごと焼け野原にしてしまうような存在と戦っている時、貴方の事を顧みる余裕はないと思う。戦いのとぼっちりで死ぬかも知れない。それでもいいの?」

ポルメリアの藍色の瞳が突き刺すようにディエスを見ている。邪な思いを見透かす清冽な瞳。

その瞳に見つめられると後暗い事がなくても怖気づいてしまう。だがディエスは勇気を振り絞った。それが彼女の課した『試練』なのだと思つた。

「僕はポリーの武勇伝を歌う、物語作者だよ?それを置いて冒険にでかけるなんて、あんまりな話さ。

それに都市魔術師さまから頂いた魔法の杖や巻物、僕がいなけりゃ使いこなせないじゃない。

魔術師さまも言っていたでしょ。『勝つために何もかも投資する』って。

僕を連れずに魔法の道具を使わずに挑んだら、戦いに負けて借金だけが残る、なんて事にもなりかねないよ」

ディエスは冗談で返したつもりだった。声が震えていないように、笑顔で返すようにやってみた。

しばらく続いたポルメリアの沈黙が苦しい。

だが彼女は、ふっと微笑んで厳しい緊張を緩めた。

「勝つために・・・か。そうね。勝たなければならぬものね。貴方の歌は私に力を与えてくれる。

それを忘れて出かけていったら、取り返しをつかない事になるかも知れないわ。

そうね。すまないけど、ディエス。貴方にはしばらく付き合ってもらうわ。

でも危ないと感じたら躊躇わずに逃げなさい。いいわね」

「まあ、ポリーが『地獄の先触れ』をけちょんけちょんに倒してしまつたら、逃げる必要もないけどね」

ディエスの言い方がおかしかつたのか、ポルメリアは穏やかに声を漏らして笑つた。

「そうね。倒したら、何の問題もないわね」

「倒せるよ、きつと」

「そうね・・・」

しばらく沈黙が続いた。ポルメリアは垂れ込めた雲の向こう側で没しようとしている太陽を見ているようだった。ディエスは生唾を飲み込んだ。

「あのさ・・・『地獄の先触れ』を倒して、天使の援軍が到着したら、戦いは終わりだよね」

「そうね」

「そしたらポリーは、どうするの?」

ポルメリアは即答しなかった。まだ没しようとする太陽の、雲越しに見える光を追っているように見える。

「・・・もしよかつたらさ、僕・・・」

はにかみ、躊躇いがちにディエスが言葉を続けようとする。だがそれをポルメリアは遮つた。

「本当は私、子供に囲まれて暮らしたかったんだ」

「え？」

「生まれてからこの方、剣しか握った事はなかったけれど、たくさんの子供を産み、育てて、色んな事を教えて、そうやって過ごす事を夢見ていた」

彼女の藍色の瞳が彼を見ている。とても穏やかで優しい顔だ。思わずディエスは言った。

「素敵だね」

「そうね」

「戦いが終わったら、きつとできるよ。・・・もし、もし良かったらさ・・・僕・・・」

顔を火照らせながらディエスは一世一代の勇気を振り絞ろうとしていた。だが、そんな彼の心を知ってか知らずか、無情にもポルメリアは首を振った。

「そんな事、無理なのは解っているのよ」

「どうして？ポリーは素敵なんだし皆放っておかないよ。僕だって・・・」

「そういう事じゃない。私の手は血で汚れすぎている」

もうポルメリアの声に穏やかな響きはなかった。

彼女はとつくの昔に自分の夢を放棄しているのだと、ディエスはその声を聞いて悟った。

『悪』を滅ぼすという言葉の下で、私は一体何人の命を奪っただろう？彼らにも家族や恋人、友人がいる。ロスペロツソを倒した帰り道、私は一人の騎士に襲われた。彼はちゃんとした諸侯に仕える騎士だった。

しかし私は彼の主君にとっては探し出し殺すべき咎人だった。彼の主君に仕える重税を課す徴税人を殺したのが私だったから。

その徴税人は農村だけでなく商人たちにも重い通行税を課していた。

そして飢饉を利用して飢えた人々相手に麦を高値で売り、暴利を得、混乱を撒き散らしていた。でもそんな悪人でも、彼の主君にしてみれば税を確実に徴収する信頼すべき徴税人だったのよ。

私はその時、自分が殺した人々の向こうに無数の人々を見た気がした。彼らは私を赦さないだろう」

「でもポリーは戦争の『英雄』だよ？そんな・・・」

「そんな事は関係ないのよ。私を敵と考える人間には、そんな事は関係ない。

仮に私が男性と結婚したらどうなる？その人は私とともに付け狙われる事になる。

私が妊娠したら？普段と違う体になった私は果たして敵を倒す事ができるだろうか。

そして生まれた子供たちは、一体どうなるのだろうか・・・」

「皆で守れば・・・そうだ！都市魔術師さまに助けてもらおうとか・・・」

「それで皆まで危険にさらすの？」

ポルメリアは沈黙した。ディエスも黙った。

確かに彼女の言うとおりであった。ポルメリアは多くの悪き支配者たちを倒してきた。

一つの城、まるごと全滅させた事だつて少なくない。

例えその人々が『悪』だったとしても、そんな彼らの家族や知人、友人、恋人達にとってポルメリアは仇だ。憎くない筈はない。

ポルメリア一人なら、その襲撃を払いのける事もできるだろう。

上級悪魔すら問題なく倒す事ができるようになった彼女だ。定命の存在など軽くあしらえるだろう。

だがその夫は？子供たちは？そして妊娠してお腹の子を労わりながら戦わなければならなくなった彼女なら、どうだろう？

一度や二度の襲撃ではない。彼女は何百人もの命を奪った事もある。

当然それだけの『敵』に狙われる事になるのだ。ディエスでさえも、その事を考えると眩暈がした。

そして彼女の絶望の深さを知った。それを支えられない自分の弱さを知った。

食事を終えた二人は無言のまま、魔法で繋げた異空間の寢床にもぐりこんだ。それほど広いわけではない。

数人の人間が雑魚寝できるぐらいの空間だから、彼女の甘やかな香りを感じる事ができる。

けれどもディエスは背を向けた。

自分ではどうする事もできない彼女の絶望を知って、彼もまた無力な自分に打ちのめされていた。

冷たい沈黙が支配したまま、二人は一夜を明かした。

良く眠れぬままディエスは横たわり、目を覚ました。同じ空間で休んだ筈のポルメリアの姿はない。

もう起きて、そして出発してしまつたのかと慌てて異空間の外に出る。

だが彼女はいた。元は麦畑だつたらう、焼け爛れた荒野の中で、

彼女は雲の切れ間から差し込む東から昇る朝日の光を浴びていた。

いつもなら、背後に立てば彼女は鋭く振り返る。けれども、その時の彼女はディエスに気づく事がなかった。

「どっしたの？」

尋ねながら彼も彼女が見ていたものを見た。

日の光に照らし出されたのは一面の荒野だつた。

黒く焼け爛れて、元は一体なんであつたのか解らないものがゴロゴロと転がっている。

何かの生き物のなれの果てだろう。蠅の羽音も聞こえる。昨夜は気付かなかつた異臭さえ感じる。

この世の終わりのような凄惨な光景。

だが一転して空に目を移せば、雲の切れ間からこぼれる太陽の光は、雲を、空を美しいグラデーションで染め上げていた。

中空には夜が残っている。紫になり赤くなり橙色になり桃色になり、やがて白く眩い光を放つ太陽が顔を覗かせる。

それは神秘的な光景だつた。残酷で美しい光景だつた。風が吹く。灰が流れる。それすらも光を浴びて輝いている。

生き物の気配は、ポルメリアとディエスと蠅の羽音だけ。その事に気付きながらディエスは溜め息を漏らした。

だが、自分の溜め息で我に返つたディエスはポルメリアを省みる。彼女は、この光景を見て何を感じたのか心配になつたのだ。

彼女は声もなく涙を流していた。しかし、それは悲嘆にくれる涙ではなかった。やはりディエスの気配に気付いていたのだろう。

彼女はゆっくりと彼を見た。

「ここには何も無い。生きているものなんてほとんどいない。なのにどうしてこんなにも美しいの？
どうしてこんなにも、この世界は美しいのだろう」

ポルメリアがデイエスは引寄せ抱き締めた。デイエスはそれを躊躇いながらも受け止める。彼女の腕の力が心地よかった。

「ここは確かに悪魔たちが蹂躪していった土地。

彼らのもたらした悲劇を思うと怒りがこみあげてくる・・・はずなのに、どうして、私、どうしてこんなに感動しているの？」

彼女の胸の中で、デイエスは答えるべき言葉を探して戸惑う。だが答えは彼女自身が持っていた。

「私は・・・今まで『善』の為に戦っているのだと思っていた。でも違う、違うのよ。

私は、デイエスが好き」

その言葉で彼の心は天に舞い上がりそうだったが、しかし次の言葉が彼の言葉を静めた。

「孤児院の皆が好き。大地の女神や竈の女神に仕える人たちが好き。イリネアが好き。トゥルスが好き。

リュイーズが好き。リュイシスが、ドウルワイトが、クレドネエが、

そしてフォリヴァスの騎士やケルマディクと一緒に戦った人々、姉上が好き。

私は、大好きな皆が住んでいるこの世界が好き。愛しているの。愛しているのよ。

こんなに凄惨で残酷な光景すら美しいと感じる程に、私はこの世界を愛している。

それが戦う理由だったのよ。私が剣を持つ理由だった。

フィスエシルの言葉が今なら解る。あの人も、この世界をどうしようもないぐらいに愛している。

だから、テツラムリアに害をなす者、全てからこの世界を守ろうとしているのよ。悪魔はおろか天使からさえも」

ポルメリアの腕の中で、デイエスは心地よい苦味を噛み締めた。

自分の想いが自分の望み通り遂げられるのは今ではないと失望しながら、それでも愛する彼女の背中に手を回した。

「・・・愛する世界の為にポリーは戦うんだね。愛する僕たちの為に・・・」

「うん。戦うよ。そして勝つ。皆の為に」

彼女の体温を感じて、デイエスは寄せては返す失望と喜びを感じながら、

その全てを冷静に、客観的に感じている自分を見つけて驚きを覚えていた。

もしかしたら、これが大人になるという事なのかも知れない。

そんな事を感じた。

二人の旅路は五日ほど徒歩になった。何処を見ても荒涼とした、悪魔たちに蹂躪された土地が広がっている。

二人の言葉は少なかった。急がず遅れず、諸侯の軍勢が出発し悪魔の軍団と交戦を開始する頃合を見計らいながら旅を続ける。途中で悪魔の小隊と交戦し全滅させた事が一度あったが、それ以外は不気味なほど平穏な旅が続いた。

それが『ワーム』が下した命令の為に二人は知らなかったが、

しかしポルメリアは薄々自分が誘い込まれている事を感じ取っていた。

五日徒歩で進んだ後、幻影の馬を呼び出し、一気にメルクス跡へ向かう。

それまでは荒涼とした荒地地であるだけだったが、メルクス周辺は違った。不吉な赤黒い曇天。薄暗い視界。徐々に上がる気温。漂う硫黄の臭い。行った事はないが、なんとなく灼熱の地獄に向かっているような気分になる。

やがて、不吉に赤黒く光る曇天に黒い鐘楼が浮かび上がっているのが見えた。恐らくあれがメルクス跡の次元穴だろう。

何処にも悪魔たちの姿は見えない。ほとんど全て諸侯の軍勢を迎撃する為に出払っているようだ。

二人は幻影の馬から降りた。無言で戦いの準備を始める。

デイエスは手渡されたありとあらゆる防御呪文の巻物を唱えた。自分には透明化の呪文。

二人ともに炎に対する完全耐性を与える呪文を。そしてポルメリアには高速化、祝福、幸運、怪我を肩代わりする寄り代、ありとあらゆる呪文を唱えた。

そして最後に、デイエスは彼の英雄に捧げる歌を歌った。それを聞いてポルメリアは満足そうに微笑んだ。

「いっぺんきまず」

いってらっしゃい。

歌を中断させる訳にはいかないデイエスは心の中で呟いた。

赤黒い空に黒く浮かび上がる鐘楼に向かつて走る。小細工は不要だ。倒すべき者もなすべき事も解っている。

彼女は相手が鐘楼にいるとばかり考えていた。何とかと何とかは高いところが好きだというではないか。

今までどんな塔でも城でも、支配者は最も高いところにいた。奴もそこにいると彼女は漠然と思っていたのだ。

だが彼は彼女の行く手を遮るように転がった巨石の上に片膝立てて座っていた。余裕の笑みはいつものように浮んでいる。笑っていない金の瞳が彼女に足を止めると命じている。距離を置いて彼女は立ち止まった。相手との間合いを計るように。

「ちよいと会わない間に随分と羽振りが良くなったもんだ『城砦落とし』。だがここには君が落とすべき城はないぞ」

彼女が身に付けた全て伝説級の武具、道具を眺めて『ワーム』は皮肉っぽく笑った。

「落とすべき城はなくても破壊すべき次元穴は存在する。倒すべき者もいる。どうする？どちらが先でも私は構わない」

『ワーム』の眉が怪訝そうにひそめられた。ポルメリアの言葉には切羽詰った緊張感も、悲壮な覚悟もない。

まるで『ワーム』との会合を楽しんでいるようだ。以前の彼女なら、こんな余裕はなかった筈だ。

「羽振りが良くなっただけじゃなくて、性格も変わったかな。それで僕に勝てると思っっているのかい？」

ねえ、『城砦落とし』。君は一体何の為に戦っているのさ。

『善』の為？『正義』の為かな？だがそれが君が命を賭して戦う価値のあるものなのかね。

善なる軍神は君に力を与えたが、君の魂に慰めを与えてくれた訳じゃないだろう。

『悪』との戦いの中で、君は大切な友人達を失ってばかりじゃないか。

それと引き換えに得られたものはなんだ？気安く君を、

幼い歌い手とともに死地に送り出す諸侯たちとの知遇ばかりじゃないのかね。

割に合う話だとは、僕には思えないがね」

滑らかに喋り続ける『ワーム』だが、訳もなく焦りを覚えているのも確かだった。

これはかつて自分の一睨みで眩暈を覚え膝が砕けそうになった少女だろうか？

『ワーム』は彼女の心を動揺させる言葉を紡いでいる筈だ。

だが彼女の藍色の瞳に宿る光は、些かも揺らがない。これはなんだ？

それでも『ワーム』は言葉を続けた。

「だいたいこれは何万年も昔から延々と続く『悪』と『善』の陣取り合戦の一つに過ぎない。

君が命を賭けて『善』の為に戦ったって、天使たちにしてみれば定命の存在が、ちよいと自分たちに協力してくれたぐらいにしか思わない。

君自身と、向こうで歌っている小さな歌い手の命を賭けるに値する戦いだと、君は本当に思っているのかい？

だとしたら……」

「そうじゃない」

『ワーム』の言葉を凜としたボルメリアの声が遮った。それは思わず『ワーム』が黙ってしまうほどの威圧感があった。それを知り『ワーム』自身が自分の態度に驚き苛立ちを覚えたほどだ。

彼女の言葉が、テッラムリアに広がった擬似地獄に涼しげに、しかし凜とした決意を持って響いていく。

「『善』と『悪』の対決なんて、今の私には関係ない。私はただ、お前が蹂躪していったものを守りたかっただけだ。

平和に暮らしていた人々の家族、生活、命。イリネアとトゥルスの誇り。

ドウルワイトやリュイシス、クレドネエ、リュイーズの想い。今まさに命を賭けて悪魔の軍勢と戦う人々。テッラムリアの全て。

私がお前と戦う理由はそれだけで十分だ。

お前が戦わないなら、私は次元穴を破壊する。それからお前を殺す。私の望みはそれだけだ」

『ワーム』のこめかみが怒りで震えた。彼女は『ワーム』を倒すと言ったのではない。殺すと言ったのだ。

地獄の諸君主が一目置き、天使の軍勢がその首を追い求める『地獄の先触れ』たる『ワーム』を、こんなちっけな小娘が殺すのもうたのだ。

「……凶に乗るなよ、小娘。軍団長級の上級悪魔を倒したくらいで、この『ワーム』と対等のつもりか。

いいだろう。相手をしてやる。この俺が本性を現せば定命の軍勢はおろか天使どもさえ物の数ではない事を教えてやる。

お前はその前に死ね」

喋りながら『ワーム』の体が膨れ上がった。

声色も少年のそれから野太い、地獄の底から響き渡り、

常人が一声聞けば恐怖に我を忘れて発狂してしまうだろうものに変わった。

赤黒い巨体が膨れ上がり、弾けるように翼と四肢が飛び出る。その瞬間に空気は燃え上がる炎と化した。

『地獄の先触れ』とは、それ自体が灼熱地獄と等しい存在なのだ、揺らめく陽炎越しにそれを見ながらボルメリアは思った。

伝承の言葉通り、空を、空間を圧するとき巨大な存在感で見る者を圧倒する。

龍にして悪魔。『ワーム』と名乗る者。獄炎龍と呼ばれる者たち。

変身が完了した瞬間、『ワーム』はその巨大な口を開き灼熱の息を吐き出した。

触れた者ごとく蒸発させる元素の火とは異なる、

炎の完全耐性すら効かない地獄の業火をボルメリアはからくもかわし、飛翔の軍靴を起動させて空に舞う。

手にあるのは神殺しの白金の大剣。供とするのは自律する浮遊盾。

「夢もなく、恐れもなく、ただひたすらに貴様を・・・討つ！」

白金の閃光となった彼女は一直線に『ワーム』に向かった。それを嘲笑う『ワーム』。真正直に正面から討つてかかるなど、殴ってくれといわんばかりの愚かな行為だ。彼は巨大な顎を開いた。その鋭い牙で引き裂き、その上で両手の爪で八つ裂きにしてやるうというのだ。

だが牙は掠めはしたが、爪は引つ掛かりもしない。『ワーム』は自分の攻撃がかわされた事にしばらく気付かなかった。代わりに横つ面に重い衝撃を受ける。白金の光で目が眩みそうになった。

一体何をされたのか？

一瞬理解できず、『ワーム』の動きが鈍る。自分の頬に手をやれば、深々と傷がえぐりつけられているのが解る。高温を発する『ワーム』の体液は蒸発する事無く流れている。彼は自分がどんな重い傷を負ったのか測った。冷気による攻撃はあらかじめ唱えた呪文で防いでいる。

だが『悪』を討つ攻撃と白金の、神殺しの金属が与える傷は、何ともならない。

目の前の中空ではポルメリアが血塗れになって飛んでいる。

『ワーム』の牙をまともに受けなかったとは言え、僅かに掠っただけでも彼女に重傷を負わせたのだ。

だが彼女は手早く小瓶の栓を片手で抜いていた。そして一息に飲み干す。傷口はあつという間に塞がった。そしてポルメリアは不敵に笑っている。

「治癒の薬で俺の攻撃を全て凌ぐつもりか。舐めるなよ！」

『ワーム』が巨大な翼を広げて軽く羽ばたく。彼の発する高温で焼けてしまった灰が舞う。

宙に舞った『ワーム』は間髪入れずにポルメリアに襲い掛かる。彼女は避ける事もせず正面から打ち合った。

両手持ちの神殺しの剣は、その白金の輝きをいよいよ強め、体格の差さえものともせずに『ワーム』の爪と牙と渡りあう。

それは壮絶な殴り合いだった。そして『ワーム』は自分が相手の策にはまった事に気がついた。

頭に血が上り、格下と侮る相手と空中で接近戦を演じるなど、まったく愚かな事ではないか。

龍が空中を飛ぶ速さは、どんな生物にも匹敵する。ポルメリアの飛翔の軍靴など、それに比べればのろまなロバのようなものだ。その速さを利用して一撃離脱を繰り返せば、『ワーム』は一度も痛手を受ける事なく勝利できただろう。

接近戦をするなら空中でやるべきではなかった。『龍の乱舞』と呼ばれる攻撃は牙と、爪と、翼と、尾で殴る。

だが空中では飛ぶために翼が使えず、バランスを取る為に尾で殴る事もできない。

高速の呪文をかけて手数を増やしたポルメリアに対して、圧倒的に攻撃する回数が足りない。

それに回復力もあった。どれだけの魔法を重ねがけして、どれほどの魔法の装備を身に付けたのか知らないが、

『ワーム』の攻撃は三回に二回ははずれる。そして重くなる傷を癒す為に高価な全快の治癒薬を、

惜しげもなく使った。彼女はまた自分の癒し能力を温存している。

相手を侮り一息で決着をつけるつもりだった『ワーム』にそこまでの準備はない。

戦う場所も悪い。彼女が周辺を気にせざるを得ない人家のある場所なら、彼女の動きは拘束される筈だ。

だが悪魔たちが『宴』を開いたメルクス周辺には、生き物の気配がそもそもなかった。

荒涼たる荒地地に心を痛めても、周りを気にせずに戦えるという事は、彼女にとつては有利な条件だった。

神殺しの剣による攻撃も重い。その傷を癒す事は、戦いの最中にある『ワーム』には不可能だった。

信じられない。

過去数百年に渡りテツラムリアの定命を弄び、天使の追っ手をことごとく退け、あるいは一国を一夜にして滅ぼした自分が、たった一人の、それも自分の生涯の何百分の一しか生きてこなかった小娘に深手を負わされ、負けようとしているのだ。

深々と『ワーム』の翼がポルメリアの剣によって切り裂かれていく。
もはや飛ぶ事もできずに『ワーム』は落下し、次元穴の傍らに落ちた。

確かに、彼女を甘く見ていた『ワーム』は弱点の冷気を防御するだけで他に手立てを立てていたわけではなかった。自身の圧倒的な力を持つてすれば、天使の眷属であろうと人間の小娘など、ちよつと爪を引つ掛けただけでも引き裂く事ができるとたかをくくっていたのだ。

それに対してポルメリアはありとあらゆる道具を使い、薬を使い、フィスエシルを通じて対『ワーム』対策を万全に立ててから望んでいる。たった一人で『ワーム』を殺せるだけの用意をしているのだ。

何をどうあがいても、このままでは負ける。そう思った『ワーム』は、逆に頭の中がすっきりとなり、冷静に物事を考えられるようになっていた。

このままならば負ける。だが・・・

完治しているとは言え、ポルメリアは何度も『ワーム』の爪を受けている。それを見て『ワーム』は笑った。

仕込みがなかった訳ではない。何度もこの爪で彼女を傷付けたのだ。そろそろ効いてもよさそうなもの・・・。

ポルメリアの息も上がっていた。全快治療の薬も残り少ない。

何度か受けた深手で溢れた血飛沫が高温で蒸発して鎧を醜く汚している。

それでも、落ちていったのは『ワーム』であり、立っているのは彼女だった。彼女の心が高揚した。これならば勝てる。

数百年間、『天使王国』で暗躍し、多くの人々を惑わし滅ぼし、イリネアとトゥルスの人生を狂わせ、悪魔の軍勢をテツラムリアに解き放った『ワーム』に、自分が勝つのだ。

だがその時、彼女は違和感を覚えた。

手に馴染んだ筈の、アルベルバル謹製の白金の剣が酷く重く、手から滑り落ちようとしているような感じ。いや、それだけではない。極限まで軽く丈夫に作られた筈のマスフスの鎧を着ている事がつらい。

まるで鎧の重みを支えられないような・・・

そこでポルメリアは眼下の『ワーム』を見た。戸惑う彼女を嘲笑っているかのように見える。

まさか、毒か！

「やつと効いてきたか。どんな脳筋野郎でも一度食らえば筋肉から力が失われ、心臓の鼓動が停止する猛毒だ。うんざりするほど傷口に刷り込んでやったが、やつと効いてきたみたいだな！

ここからが本当の勝負だぜ、『城砦落とし』。お前が俺を殺すか、お前が剣を構える事ができなくなるか。どっちが早いかな？」

暴力と炎の使い手である『ワーム』が毒を仕込むとは考えていなかったポルメリアに解毒剤の用意はない。

もしかしたらデイエスが解毒の呪文を持っているかも知れないが、

不用意に彼の下へ向かえば、二人揃って『ワーム』に殺されるだろう。

地表に落ちた『ワーム』が大きく口を開き、宙を跳ぶボルメリアに対して灼熱の息を吐く。先ほどのものとは違い、何百本という細い火線が拡散して逃れようとする彼女を追い詰める。何度か火線に焼かれたが、彼女はそれどころではなかった。時間が経てば経つほど不利になるのは自分だ。手元の剣に込める力が失われていくのが解る。緩慢な死が自分に忍び寄ってくるのが解る。

飛びながら、火線をかいくぐりながら彼女は衣服を切り裂いて簡単な紐をつくり、利き手である右手と剣の柄を縛りつけた。ふと眼下に目をやる。姿を消したまま不安な思いを押さえつけながら、彼女の為に歌を歌うディエスの事を思った。

神さま。善なる戦の神さま。たった一つ、一つだけのお願いです。私に、あと一撃、一撃だけで構わない。奴に叩きつけるだけの力を下さい。あの子を救う為に。それだけで構わない。だから！

逃げていたボルメリアが反転する。雄叫びをあげて正面から灼熱の息を吐く『ワーム』に向かって突撃をする。幾たびも灼熱の業火を受けても彼女は怯まない。

逆に息を吐き続ける『ワーム』は正面からやってくる彼女を迎撃するのが遅れた。

渾身の力を振り絞った彼女の捨て身の一撃が、深々と『ワーム』の眉間に沈む。

灼熱のプレスが途切れ、『ワーム』は仰け反り、そして悶絶した。金色の瞳に満ちていた凶暴な光は既がない。赤黒い巨体は地響きを立ててテッラムリアの大地に崩れた。

だが、まだ終わりではない。

仰け反った『ワーム』の首がしなり、その反動でボルメリアは投げ出された。

しかし彼女は自分の役割を忘れた訳ではなかった。飛翔の軍靴が持ち主の望み通りに、彼女を次元穴の傍らに運ぶ。無数の火傷が自分の高速治癒で水蒸気をたてて回復していくが、彼女の動きに力はなかった。

それでも、彼女は最後の力を振り絞って次元穴とテッラムリアの大地との境界に剣を突き立てる。

その巨大さに対して使われた力が少ない、不安定な次元穴は、たったそれだけの衝撃を受けただけで維持できなくなり消滅した。遠くで次元穴中央にそびえていた鐘楼が、空間が閉じた事によって切断され、音を立てて崩れていくのが解る。

勝った。彼女は勝ったのだ。

だが同時に彼女も膝をつき崩れた。もう限界だった。それでも彼女は満足していた。自分はなすべきをしたのだと。不意にイリネアとトゥルスの死に顔を思い出した。二人とも満足そうに微笑んでいた。今なら二人の気持ちが解る。そうか。あれはそういう事だったのだ。

「ポリーー！」

ディエスの声が遠くから聞こえる。倒れる瞬間、彼女は宙を舞う無数の白いものを見た。リュイーズが死んだ晩に見た、林檎の花の花吹雪のようだ……

倒れた彼女をディエスが支える。だがその藍色の瞳には清冽な光は宿っておらず、その四肢も力なく崩れるばかりだ。

「ディエス。私、笑ってる？笑っているよね……」

虚ろな表情の彼女が呟いた。一瞬息を飲んだディエスは涙をこらえていった。

「うん。とっても素敵な、いい笑顔だよ」

「ディエス、歌って・・・歌って・・・うた・・・」

声途切れる。同時に彼女の鼓動が薄くなり、そして消えた。彼はしばらく何も言えなかった。だがやがて涙を振り切り、腕に抱いた彼女に向かって呟いた。

「ああ、歌うよ。歌い続けるよ。世界の為、皆の為、そして何より、愛する君の為に」

天を仰いだディエスが鎮魂歌を絶唱する。赤黒い曇の空には、『ワーム』が焼いた火の粉が灰となって、白く飛んでいた。やがて雲の切れ間から光がさした。太陽の光が全てを浄化するようで神々しい。

それが彼女が守ったものだとディエスは知っていた。だから彼女の為に歌う。歌い続ける。

美しい日の光の下、いつまでも、いつまでも、彼は歌い続けた。

数ヶ月のち、アンゲルウルプでは一つの結婚式が盛大に行われようとしていた。

花嫁は都市魔術師であるフィスエシル。

花婿は結婚式と同時に戴冠式を行い、『天使王国』初の王となるカシユール・フォリヴァスだった。

「準備はいかがですか？」

花嫁を迎えに来た花婿だが、白いドレスを身にまとい、

美しく化粧も終えて準備万端整いながら不機嫌な花嫁を見て肩をすくめてみせた。

「どうしたのです？」

「どうもしないわよ。ただ、やっとあの子の消息が知れただけ」

「あの子？」

「ポルメリア・ランキン。今度の戦の、一番の殊勲者よ」

「ああ、『城砦落とし』ですか。で、今どこにいるのですか？」

「肉体は地に帰り、魂は・・・たぶん天上へ」

彼女が言っている意味を悟り、花婿は納得した。

「それで怒っていらっしやるのですね。でも戦争の功労者なのですから、復活させる事もやぶさかではありませんよ。髪の一房でもあれば可能でしょうに」

カシユールの言葉にフィスエシルは皮肉っぽく笑った。

「彼女の今わの際の言葉は『私、笑ってる？笑っているよね』だそうよ。

つまりあの子は自分の人生に満足して逝ってしまったのよ。この世に未練のない魂を復活させる事なんて、できやしないわ」

「なるほど・・・」

「なによ」

「いや、だから怒っているのか、と」

「そうね。テッラムリアを守るべき責務を持った娘が、役割を果たしてあの世へ逝った。でも、本当の戦いはこれからだったのにね」

対悪魔戦争の最高指揮官とも言える二人の下にポルメリアの消息が伝わらなかったのは、

『ワーム』が死に、次元穴が閉じて全てが終わったわけではなかったからだ。

「ったく、天使どもったら融通が効かないったらありゃしない。

悪魔の軍勢五個軍団を粉碎したはいいけれど、目指す主将の『ワーム』がいないと解ったら、とつとと帰っちゃってき。おかげで敗残の悪魔たちがテッラムリア中に散らばっちゃって、未だに連中は辺境で悪さしているのよ。

昨日もランキン侯爵から苦情をもらっちゃったわ。

『優秀なる戦士である私の妹を使いながら悪魔どもを殲滅できず、

それどころか私の可愛い妹の行方さえ解らないとは、一体どういう事ですか?』ときたもんよ。

ふんっ！諸侯会議の時までポルメリアがいる事すら忘れていたに違いない男がっ！よく言うわ」

「しかし、とにもかくにも中原での戦は一応終わりを告げましたよ」

満足そうなカシユール。そしてつまらなそうなフィスエシル。

「そうね、貴方にとっては最も望ましい筋書きだったわね、カシユール坊や。

なんてったってトマス・ウォレンサーは戦死してしまったのだから」

『天使王国』に王を誕生させるカシユールとフィスエシルの婚姻に反対するだろう最も有力な諸侯、

トマス・ウォレンサーは悪魔掃討戦の最中に戦死した。トマスだけではない。

数ヶ月の間に何人も諸侯が死んでいる。騎士や兵士、庶民の数は言わずもがな、だ。

「望ましいだなんて、人間きの悪い。私も戦友の死に心を痛めていますよ」

「王位と私を争う筈だった『戦友』よね」

「そうですね。友と愛する人を争わずにすんだ事は幸いでした。おかげで私は、貴女と王位を手に入れる事ができる」

「手に入れるだけじゃだめよ。義務を果たしてもらわないと、王位を授ける意味がない。

まあ私にとってはうたかたの夢のようなものだけだ」

そこで初めてカシユールのにこやかな顔が変わった。

「全てが夢、ですか。彼女の事も?」

「貴方は私が一体どれほどの年月を生きてきたと思っているの?それに比べて貴方たち人間の人生のいかにも短いこと。

事故にあったり殺されたりする事がなければ、きっとこの先、あと千年ぐらいは生き続けるのでしょね。

あの子と過ごした時間は、貴方と過ごすだろう時間に比べれば、きっと利那みたいなものよ。でも私には一瞬でも、十数年でも、数十年でも、同じ事なのよ。解る？王陛下」

「私では貴方の孤独を癒せないわ？」

言われてフィスエシルは激しく瞬きをした。

「へ？」

「私は、子供の頃に貴女を一目見た時から、ずっと貴女を愛してきました。貴女の抱える孤独も理解している。だから、せめて私が生きている間だけでも、私は貴女の慰めになりませんか？」

「本気で言っているの？」

「私はいつでも本気ですよ」

彼女は結び上げた頭に手をやって、迂闊に頭を掻くと髪型が崩れてしまう事を思い出し、手を下ろした。そして、ちよっと笑って溜め息をついた。

「私にとっては、この世界で起こる全ての事が慰めなのよ。貴方の事も、貴方の両親たちも、そしてそれ以前の先祖たちも。

私は、この世界を愛している。テッラムリアに害をなすものは、悪魔も天使も同じだと考えている。

誤解しないで欲しいのは、貴方を愛せない、ではないということ。貴方を含めて、私は世界を愛している。

貴方も含めて、私は私の知恵と力が及ぶ限り、この世界を守るわ。

貴方が愛した女は、そういう女なの。貴方は、それに耐えられるかしら？」

カシユールは静かに彼女に近付き、彼女の細い肩を包み込むように抱いた。そして耳元で囁いた。

「そういう貴女を私は愛したのです。貴女が世界を愛し、守るなら、私は王として貴女を愛し、守ろう。

私の戴冠と私たちの結婚はそういう意味なのですわ、フィスエシル」

「上手くまとめたわね」

「それを期待されているから、王になるのですわ？」

真面目な顔をしていたカシユールの顔が、いつものように宮廷人の余裕を見せた笑みになる。

それを見てフィスエシルは声をあげて笑った。彼は何処まで言っても貴族であり宮廷人なのだ。それ以外の何者でもない。その事が楽しかった。

「そろそろ時間です。参りましょう、我が王妃」

「そうですね、我が王。背の君」

連れ立って部屋を出て、二人は回廊を歩く。空は澄み切った晴天。日の光は白く輝き、二人の足元を照らす。

フィスエシルはふと空を見上げた。白い光の中に、あの日アンゲルウルフの空で戦ったポルメリアの姿を見たような気がした。

彼女は呟いた。

「さようなら、ポルメリア・ランキン。いずれまた、会いましょう」

祝福の鐘が響き渡る。歓喜の声が街に満ちる。平和の到来を祝う声が轟く。

その日、『天使王国』は有史以来、初めて王をいただく王国となった。

ポルメリアを知ることが一部の者以外に、彼女の戦い、そしてその死に至る物語を知る者はいない。

全ては記憶の彼方へ消えていった。